

## Wエコの取り組み-第5報-

### ～ボトムアップの重要性と介護業界のエコについて考察～

能見 昭彦<sup>1)</sup> 熊沢 誠<sup>1)</sup> 中村 俊太郎<sup>2)</sup> 田村 和幸<sup>1)</sup> 美原 恵里<sup>3)</sup>

1) 公益財団法人脳血管研究所 介護老人保健施設アルボース

2) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院

3) 公益財団法人脳血管研究所 介護老人保健施設アルボース 施設長

[はじめに]当財団においては、平成22年度からエコ活動を開始しており、「繋ぐ」～永遠の未来のために～、を環境理念として活動している。同年年度末には、環境省委託機関であるエコアクション21の認証を取得し、毎年認証を継続してきた<sup>1)</sup>。これまでの取り組みは、まずソフト面として空調使用ルールの徹底や照明点灯ルールなどの意識改革を行い、活動がある程度定着した後にハード面において空調機器などの更新を行ってきた。また、平成25年度は新たなテーマとしてゴミの削減に取り組んだ。今回、これまでの二酸化炭素削減とゴミに対する取り組み結果を報告し、それらから学んだ今後の介護業界におけるエコ活動の方針について考察したので報告する。

#### [二酸化炭素削減への取り組み]

1) 部門ごとにそれぞれの特徴を活かした活動を行うことで、ボトムアップを行った。

2) コアメンバーが毎月ラウンドを行い、状況把握と各部署へのアドバイスをを行った。

3) 吸収式冷暖房機（重油式）から高効率チラー式冷暖房機（電気式）への空調機器の更新を行った。

4) 給湯設備（重油式）からエコキュート（電気式）へと更新した。

5) エコアクション21の専門家からの助言を活かしながら、活動を行った。

#### [ゴミ削減についての取り組み]

1) 新たなリサイクルとして、ペットボトルの回収を行った。

2) 栄養科から排出される残飯を養豚業へ依頼することで、可燃ゴミを飼料化した。

3) 古紙再生紙を細分化することで、職員に対する意識付けを行った。

#### [Wエコプロジェクト委員の意識]

1) 年度末に委員に対し、一年間の活動に対するアンケート調査を行った。

[活動結果]二酸化炭素について、年度比較で開始前の平成21年度（1,993,108kg）に対し、平成25年度（1,495,895kg）となり、（497,213kg、24.9%）の削減を達成した。Wエコのエ

コロジー（地球環境保護）に対しては十分達成したと思われるが、もう一つのエコノミー（経費）に関しては、平成21年度（81,025,334円）に対し、平成25年度（90,418,105円）となり、（9,392,771円、11.6%）増額となった。その理由として単価の上昇が影響しており、平成25年度の単価を平成21年度にあてはめて試算すると、年度単位で約1,600万円削減をしたことと同じであった。ゴミの削減について、総排出量は平成24年度（181,031kg）に対し平成25年度（183,114kg）と（2,083kg、1.2%）増加した。この内訳として、リサイクル可能ゴミ量は平成24年度（10,465kg）に対し平成25年度（50,017kg）と（39,552kg、378.9%）増加した。これによりリサイクル率は平成24年度（6.1%）に対し平成25年度（37.5%）と（31.4%）増加した。総ゴミ処理費用については、平成24年度（3,582,180円）に対し平成25年度（3,083,084円）と（499,096円、13.9%）削減した。委員の意識について、①委員会自体の活動評価については9/10点以上の高評価が50%から55%へ増加②自分の貢献度については、貢献できたと回答したスタッフが72%から78%へ増加した。

[考察]当財団では、Wエコプロジェクト委員会を立ち上げ活動を行ってきた。各部署の特色を活かした活動を行うことで、委員個人の責任性や意識が向上してきた。活動をトップダウンではなくボトムアップの形に移行することは重要であり、今後はPDCAを部署内で運用できるシステムを目指している。

その活動を取り巻く環境として、医療・介護業種には厳しい現状が今も続いている。EA21事務局のデータによれば、認証施設の30%が製造業、22%が産廃業であり、医療・介護の業種は全体の1%にも満たない件数にとどまっている<sup>2)</sup>。そのような状況の中、当財団では段階的に活動を進めてきたが、サービス業的なニーズが色濃い中、我々と製造業との大きな違いは「節約＝サービスの低下に非常に結びつきやすいこと」である。エコに走りすぎてクレームが増えたり、療養環境の低下を招くことがあっては、利用者本位の業種としては本末転倒であり、それらのバランスを常にとりながら活動を行うことが重要と思われる。また、現段階ではゴミのリサイクルを財団内で行っても、その後の回収や処理業者などのインフラ整備が不十分な面がある。今後の取り組みの活性化に対して、リサイクル先等の整備が不可欠であり、市町村の環境部や環境省においては早急な整備が望まれる。

[まとめ]当財団におけるエコ活動のこれまでの報告を行った。実際の活動を行うのは職員一人ひとりであり、ボトムアップの形に移行することが非常に重要である。また活動を継続するにあたり、取り巻く環境の整備も重要であり、より活発なエコ活動を広めていくためには、社会的なインフラ整備も必要と思われた。

## 参考文献

- 1) 第23回全国介護老人保健施設大会沖縄CO2削減を目指して（第2報）能見昭彦他
- 2) 平成21年度EA21HPデータより抜粋医療・介護業種について現在30/8102件